みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

水の器：手のひらから地球まで

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田口, 理恵, 久保, 正敏, 秋道, 智彌 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4602

水の器 ― 手のひらから地球まで

水と器

人は水なしでは生きていけない。人と水との関わりは深く、衣食住から農業、工業、治水に至るまで多岐に渡る。人が水を使う場面も、動詞を挙げれば、注ぐ、汲む、沸かす、掬(すく)う、撒(ま)くなどさまざまで、水を扱うために用いる容器・道具と、その呼び方も、数限りない。そこで、ここでは、人が飲み水を扱う際に用いる容器・道具類を「器」と総称したい。

のどを潤すために手にする器を考えてみよう。グラスやコップの中の水は、蛇口から、あるいは川や井戸から汲んできたもの、場所によっては雨水をためた水甕から汲んだ水になるかもしれない。いずれにせよ、飲用の水は、蛇口、井戸、川の水汲み場などを取水口として、それぞれの地域の水源から得た水を器にため、より小さな器へと分けていったものということができる。水源から口元へと水がたどる道程で、人はさまざまなサイズの器で水を使い分けており、生活世界の「水の道程」は多様な器に彩られているともいえる。

器は、液体である水に一定の量と形を与える。器があるからこそ、水を蓄えることも、分けることも可能になり、水の器は人と人の関係をつなぐものとなる。また、水の道程の上に並ぶ器の種類は、地域の水事情によって異なり、水の器は、それぞれの地域の環境とともに、ライフラインのあり方や生活に必要な水の量を知る手掛かりにもなる。あるいは、水盃のように、時として人は器の水に特別な意図を込め、あるいは、さまざまな意味を汲みあげる。

つまり、「水の器」は、生態環境と人の暮らしを媒介し、日々の営みに必要な水の量や人びとの関係を映すものであり、文化的社会的な意味に色づけされたものということができる。このように「水の器」を捉えれば、身近な容器・道具類のみならず、水田、棚田、貯水池、ダム、井戸、水路なども「水の器」であり、また、雲、地下水、河川、湖沼、海なども自然の「水の器」として扱うことができるだろう。私たち人間の生命を支える水の道程は、道具としての身近な器から、ダムなどの大規模な人工の器、自然の器へと、手のひらから地球までに至る、さまざまな水の器とともにある。

図1
「水の器」展のシンボルマーク

4つの「水の器」

今回の企画展では、国立民族学博物館（以下、民博と略す）が所蔵する民族誌資料を中心に、世界各地のさまざまな水の器を紹介する。「器」の字形に見立てた4つのコーナーに分けて、水と人の関わりを考えることにした。

「1．生活世界の身近な器」では、民博資料から選んだ世界各地の水の器を、手元の器から取水口へと遡るかたちで並べ、生活世界の水の道程を紹介す

る。では、取水口から得る水源の水はどこから来るのだろう。そこで「2．多様な水源」では、地域ごとの水源と、その先にあるさらなる水の源へと目を向ける。「3．水の器・地球」では、水循環の仕組みや水資源の世界分布とともに、物理化学的に見た水資源の特性を紹介する。さて近年、私たちはペットボトルという新たな水の器を手に入れたが、この器の意義やそれに伴う生活文化の諸変化を「4．水のペットボトル」で考えてみたい。

手元の水から水源へと遡り、さらに水源に水をもたらす地球のメカニズムへ、そして手元の水へと戻ってくるように、水の道程に沿って4つのコーナーをつなげている。

近年、「水の危機」が叫ばれ、水資源が地球環境問題として盛んに議論されるようになった。水に恵まれた日本にいると、水の欠乏や汚染が深刻化する地域の実状は想像しにくいかもしれない。だからこそ今、私たち誰もが手にする一杯の水から、暮らし、地域、世界、地球とのつながりへと想像を膨らませてみよう。世界各地の多様な「水の器」から、全ての生命が必要とする水が、地域によって偏りがあり、それゆえに人びとは、水との多様な関わりを地域ごとに育んできたこと、そして、暮らしの中から新たな関わりを生み出していくことを考えてみたいからである。

生態史・人と水・水の器

この「水の器」展は、人間文化研究機構・連携研究「人と水」（代表　秋道智彌、「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」）の成果の一つであり、人間文化研究機構・連携展示という位置づけの元で実現した。連携研究「人と水」は、自然科学系、人文社会学系の研究者が参加した研究プロジェクトで、5年間の研究成果の公開を展示という方法で試みたのが今回の展示である。また、この企画展は、民博が新たに設置した共同利用展示場で行う最初の展示となり、民博の「文化資源プロジェクト」の一つに位置づけられている。

「水の器」展は、実行委員会のメンバー数名が「ルース・アライアンス」と呼んで取り組んできた連続展示の一環でもある。これは、総合地球環境学研究所での生態史プロジェクト（代表　秋道智彌、「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945～2005」）が発端で、生態史プロジェクトの成果として、第56回企画展「モチゴメの国ラオス―メコン河流域の暮らし―」（2007年10月17日～2008年1月7日、於天理大学附属天理参考館）を手掛けたことから始まる。その後、鹿児島純心女子大学附属博物館開館特別展「川内川―川と人のくらし―」（2008年10月25日～2009年4月30日、於鹿児島純心女子大学附属博物館）、天理ギャラリー第136回展「モンスーンアジアの竹文化―素朴な技術（わざ）と造形の美―」（2009年2月16日～3月28日、於天理ギャラリー）を実現させてきた。

このルース・アライアンス展示は、巡回展示や資料借用展示とは発想が異なり、展示を主催する博物館・機関を主体としつつも、展示研究のメンバーが、資料や情報の選択、企画コンセプトの議論に積極的に関わって、次々と展示を展開させていくもので、ゆるやかな連携を持った展示の連続を意図している。

以上、本企画展は、人間文化研究機構内外の、人や研究機関の協力・連携によって実現した。資料や情報の提供、資金の提供をいただいたすべての関係各位に篤く御礼申し上げる。

（田口理恵・久保正敏・秋道智彌）